

平成二十四年六月一日発行（毎月一回）日発行 通巻八六九号

火星

平成二十四年六月号



七曜抄 (八)

山尾玉藻

峰々のけふ高からず葱坊主

いつまでも電話鳴りをり葱坊主

大晴の大風なりし樟若葉

一人居に覇気ある蠅の入り来たる

さざめいて巫女の通りし淡竹の子

沙羅の枝を蟻の流るる更衣

桃一本の袋掛けして病みるたり

丹生の子に昏れやすかりし合歡の花

パラソルの人たちまちの作り声

ゴム草履の真つ赤も鮎の摺みどり

太白星

柳生千枝子

冴返る伝言忘れぬしことよ
梅白く昏れ残りつつ昏れて来し
春暁の目覚めの耳のあたたかし
ふるさとや花の上野の土黒き
急ぎ鳴き終り日永の鳩時計
観音の頬にふれざる指おぼろ
猫柳ねむり足りたる眼のひかり

杉浦典子

頂に白雲かかる厩出し
浚ひたる池にも燃す余寒かな

朧夜のデッキブラシの立つてをり
通ひ舟着きたる島の草の餅
甲板に輪投げの輪とぶ日永かな
鶏小屋へ卵をとり春の泥
春の土均せしシャベルぬれてをり

浜口高子

春の宵棕櫚の陰より猫とんで
ひとつづつ桶屋の桶の春の闇
回廊の先より声が春の闇
梅の香や昨日の屋台影もなし
紙雛船坂峠の風に向き
身を反らせ漁るおぼろの浅蜷舟
差し伸べる観音の御手野梅かな

火星作品

山尾玉藻選

鷹の巢を話す両手を広げけり
宝塚蘭定かず子

オムレツのゆれて置かる花曇

ビニールに量る鶏もつ養花天

鎌研ぎの立て膝に桃咲きにけり

香木をござに商ふよなぐもり

高^た円^か山^まの雪に日当る針供養
大和郡山城 孝子

寄せにけり雛流しし夜の布団

波音のまつはる桜芽ぐみけり

病床の夫に見えぬる巢組みかな

合格や炬燵より足はみ出し

鳥つるむ寺の玉砂利青みけり
八幡坂口夫佐子

鼻あげて口の三角春の象

朝ざくから母と合はせし深呼吸

おくるみの嬰のまたたき楠若葉
 受験子の美しかりし喉仏
 小さきを大きく跳びぬ春の泥
 八幡天谷翔子
 春風や戸をたてからつぽの厩
 春風や回転木馬口あけて
 一斉に止みばらばらに囀れる
 花冷や皿の生肝うすしうすし
 もみ紙の雛のかんばせ雛だらけ
 宝塚山本耀子
 雪解や盆に休める利休箸
 宝塚山本耀子
 すずかけに実のぶら下がる鳥の恋
 大道芸終ふ青草に置く帽子
 落し角見せてもらひぬ嗅ぎにけり
 初音かな空耳にこそふさはしき
 神戸深澤鱻
 耕の高きにあらず印南野は
 囀の山重なりて高からず
 雨脚の見えで舟焼く雪間かな
 春の鴨薄目のままに流されし

選のあとに

山尾 玉藻

鷹の巢を話す両手を広げけり

蘭定かず子

ある程度の高山や深山へ踏み込まなければ鷹の巢には出会えないだろう。山歩きを趣味とする作者にその好機があつたのか、それとも登山仲間が発見したのだろうか。「両手を広げけり」から鷹の巢が相当立派であつたことや、巢の様子を説明する人物の昂ぶつた得意げな顔つきも想像できる。間接的読みで鷹の巢を想像させる点が楽しく、ちよつとしたロマンも感じる。同時発表作へ鎌砥ぎの立て膝に桃咲きにけり、桃の花と立て膝の自然さが互いに映発し合い、春の長閑な風景を濃くしている。

寄せにけり雛流しし夜の布団

城 孝子

女性は雛を流した後はじこことなく寂しいものだが、かといつて強く意識するほどでもない。雛を流した夜、そのような微妙な心理が無意識のうちに働き、自分の布団を並んで寝る人の布団に寄せて敷きのべたのだろう。勿論肩を並べて寝た相手はご主人であつたのだろうが、いやいやそうとは限らないと思うのは読み手の勝手。そこが愉しい。へ病床の夫に見えぬる巢組みかなは、病中の夫への励ましがそれとなく感じられる愛ある一句。

鼻あげて口の三角春の象

坂口夫佐子

象が喜ぶ表情は識別し易いらしい。とは言つても表情筋の

ある人間のように笑顔を見せるわけではなく、鼻を高々と上げ目を細くしていよいよ優しい眼差しをするらしい。しかし掲句、作者にその知識があつたかどうかは全く関わりないことである。象が鼻を高々と上げた時に思いがけず三角形の口が現れたのだ。象のおおらかな仕草に、作者は象が喜んでると直感したのだ。勿論、辺りの麗かさが作者にそう感じさせたのであるが、その点で「春の象」の鷹揚な断定に共鳴できる。へ鳥つるむ寺の玉砂利青みけり」の「青みけり」に詩人らしいこころを感じる。

小さきを大きく跳びぬ春の泥
春の泥兄を叱れば妹泣く

天谷 翔子
河崎 尚子

「春の泥」を二句。一句目、「女ごころと春の空」と言われるように春の天候は変わりやすいが、ひと雨ごとに春の気配が濃くなって雨もまた嬉しい時節である。そこで雨後にできた水溜りを跳ぶのでさえこころが弾み、つい勢いよく跳んでしまう。その心理を捉えた「小さきを大きく跳びぬ」とは誠に巧みな表現である。決して他の季節の泥ではない「春の泥」の本意をついた一元句。二句目、一緒に遊んでいた幼い兄妹の兄の方が母親に叱られ、叱られていない妹の方が泣きだしたのだろう。妹は突然の母親の叱責に驚いた所為もあつたのだろうが、兄が急に気の毒になつたのだろう。子育て真っ最中の私もつい口走つた「お兄ちゃんのくせに」が聞えて来るように、つい苦笑してしまふ。「春の泥」のあたたかなひびきが微笑ましさを増幅する。二句共に「春泥」の句ではなく「春の泥」の句である。(以下略)

恒星圈

廣畑忠明

前を行く人春燈の門へ消ゆ
ふるさとも遠くなりけり花菜飯
段畑を打つ老人の影一つ
乙女椿尼僧に狭き荒れし庭
草青む堤より見る草競馬

野澤あき

深澤鱧

ふるさとの初蝶にあひ父にあひ
紅白のリボンを胸に雲雀東風
点滴のうすももいろや木の芽雨
点滴にシヨパンながるる春の雨
春の雪降りたり亡夫の誕生日

蒟蒻のつくりうすうす出開帳
紅梅の瑞枝はなから紅なりし
椶の芽のあまた掻きあり峠口
磯遊び乾くに間ある歌枕
にんげんの躑躅白し磯遊

波田美智子

藤原冬人

春一番雷門の大提灯
足音に寄りくる真鯉花夕べ
曾ばばの吾も座につける雛の宴
感性も枯れ春愁もなかりけり
啓蟄やわら縄啣へ鴉とぶ

マラソンの足音そろふ四月かな
軍用機の航跡高し花辛夷
羽後の峰きみどりに蛙生れにけり
病臥せる母目を開けぬ沈丁花
泡ひとつ魚息づきて水温む

獅子座

山尾玉藻推薦

川端 俊雄

花にまだ少し間のあるふたり旅
マスクして火葬場の建つ噂など
吾にくすり妻にくすりや霞立つ
鍼のつぼ探られてゐる花の冷

緒方 佳子

市役所の矢印どほり納税す
雛かざり一夜灯してねむりけり
神楽殿梅のかをりの滴せり
げんげ田に入りたる人の振り返る

藤田 素子

水温むブラスバンドの音合せ
退屈のふりなどしてつつくしんぼ
みどりごのため息ひとつ蝶生る
鍵束の音の過りし梅林

涼野 海音

如月や松ぼつくりを蹴りし音
啓蟄の畦ゆく手さげ大きかり
木の芽吹く古墳の前のはたづみ
絵の中のわれに似し人春の暮

助口 もも

紺青に山暮れそむる雛の市
菜の花の対岸へ行く橋のなし
かげろうてゐし松の木の菰はづし
閑取が風呂敷下ぐる春一番

井上 淳子

うぐひすや丸き墓石の南蛮寺
観音にあづけしリュック風光る
居留地のゆさゆさとゆれ花ミモザ
わが影に音なく入りく残り鴨

根本 ひろ子

春北風鴉しきりに呼び合へる
芹摘んで水濁しけり宇陀郡
陵の垣ゆるびをり鳥の恋
眼帯のをんな先生卒業歌